

モンゴル国からの活動報告 8 モンゴルの暮らし発見

池本めぐみ

国立国際医療研究センター 国際医療協力局 助産師

はじめに

私は、独立行政法人国際協力機構の「医師及び看護師の卒後研修強化プロジェクト」の長期専門家として国立国際医療研究センターからモンゴル国に派遣されています。モンゴル国に赴任し、早2年が経ちました。赴任時は、COVID-19のために首都のウランバートルがロックダウンされており、海外からの入国後はホテルでの隔離を求められました。その後も不要不急の外出の自粛、在宅勤務やオンライン等の利用を経て、医療機関の視察や地方への出張ができるようになるなど、状況が刻々と変わりました。今では、街中でマスクをしている人の方が少なくなっています。

今回は、この2年間のモンゴルでの暮らしの中で気づいたことや驚いたことをご紹介します。

1. 夏の祭典ナーダム

ナーダムは、モンゴルの古くから伝わる祭典の一つで、3競技「モンゴル相撲、競馬、弓射」を競います。2020年と2021年のナーダムは、COVID-19の影響で中止され、2022年7月にモンゴル国民念願のナーダムが開催されました。開会式は、ウランバートル市内のナーダムセンターで開催され、パレードで騎馬隊が入場した時の感動と熱気が数年に及ぶCOVID-19との闘いさえも忘れてしまうようなものでした。そして、とにかく馬が美しく、カッコいいのです。モンゴル人は、小さい頃からこのように馬を見て、乗っていれば、馬が大好きになるのが当然です。私でさえ、自分が午年であることを嬉しく思うほどでした。

競馬は、2歳馬、3歳馬、4歳馬、5歳馬、6歳馬、6歳以上の馬が各レースとして草原を駆け巡ります。その騎士は6~12歳の子どもです。まさに、小学校

の国語の教科書にあった「スーホの白い馬」のようでした。ゴール数キロ前になるとゴール会場から馬らが走っているあたりの土埃が舞い上がるのが見えます。子どもの騎士も必死に声をあげ、ムチをふって馬と心をつなげてゴールを目指してきます。その迫力と感動は、言葉にできないほどです。



2. 夏は短い

モンゴルの夏は日本の夏と比べると非常に短く、1年のうち6月~8月頃の2か月ほどしかありません。5月末くらいから一気に新緑が鮮やかに出て、植物の生命力と美しさを感じます。とは言え、気を抜いてはいけません。私の着任当時の6月には積雪があり、娘と喜んで雪だるまを作ったので、6月でも急に寒くなることがあるということです。

このように短い夏なので、モンゴルの方は長期休暇をとり、涼しい地方や別荘に出かけることが多いです。大切な仕事はナーダムの前までにある程度進めておかないと、「夏休みです」「地方に行っていたので携帯電話が圏外でした」と連絡が取れなくなることも多々あります。さらに「ナーダムが終わると冬」だとよく聞きました。2回の夏を経験し、夏の短さを感じ、短い夏を気持ちよく家族と過ごし、空

気のきれいな地方で過ごしたいという気持ちが理解できるようになりました。そうなんです、ウランバートルは、国民の約半分の約160万人が住んでいて、社会問題となる車の渋滞と大気汚染があります。そのため（それを理由に？）地方などの空気がきれいなどころに出かけることが大切にされています。また、この短い夏は気持ちよく自由に外で過ごせる期間なので、夏はイベント事が盛りだくさんです。

3. 右折や左折の車が重なる

先ほどお話ししたように、車が多く、渋滞が社会問題のひとつです。朝晩の通勤・通学の時間には、多くの道路の交差点や曲がり道に警察が立っており、信号があるところでも交通整理をしています。右折や左折をしたい車が順番に並んで前から順番に曲がっていくということはありません。少しでもスキがあれば、何重にも車が左右に曲がろうとするので、曲がる車が直進の車をふさぎ、通行を止めてしまうこともあります。このような感じなので、車の接触や交通事故も多いですが、競馬で大草原を駆け抜けるモンゴルの文化を考えると理解できるような気がします。

4. 極寒でも建物の中は暖かい

冬になると、一気に寒くなり朝晩は最低でマイナス20～30℃くらいまで下がります（-40℃代になることも）。しかし、そんな外の気温とは裏腹に家の中や、スーパーマーケットの中などの建物の中はものすごく暖かいのです。なぜならば、セントラルヒーティングが四六時中作動しており、常に暖かい状態を保っているからです。建物の中は、本当に文字通りに隅々まで暖かく、快適に過ごすことができます。室内に干している洗濯物は早く乾き、夜に洗濯したものが翌朝には乾いているという具合です。その一方、空気は乾燥しているので肌や唇が乾燥しやすく、外出時にハンドクリームやリップクリームが欠かせません。

5. 春には家畜の新しい命が生まれる

2022年4月、地方に出張に行きました。春は、家畜（牛、馬、ヤギ、ヒツジ）が出産を迎える時期で、道中で多くの赤ちゃん達にも出会いました。この時は、窓を開けると「めえ～、めえ～」と可愛い声が聞こえ、子ヤギがたくさんいました。道端で子牛が生まれ母牛が全身をきれいにしている姿もありました。寒く長

い冬を生き延び、新しい命が生まれることは、すごいことです。そこには、遊牧民の極寒の冬を生き抜く知恵と強さ、生きる厳しさがあります。



6. 移動式住居は近代的

遊牧民が住む場所は、移動式住居であるゲルです。家畜を育てるために季節に合わせて最適な場所に移動します。最近はゲルも近代的な技術を導入し、太陽光パネルによる発電、四駆の車やバイク、テレビアンテナなどがあり、室内には冷蔵庫やテレビもあります。助産師の方々とオンラインでイベントや会議を行うとゲルから参加している方もいます。



おわりに

最近、モンゴルの方の姓だと思っていたものが父親の名前だと知りました。モンゴル式でいけば、私の名前は、「裕一（私の父の名前）めぐみ」になるそうです。とても驚きましたが、今もこのように知らない事ばかりだと思います。これからもモンゴルの文化や生活を感じ、大切に過ごしていきたいと思っています。

最後になりましたが、モンゴル国および日本のすべての関係者に深く感謝申し上げます。